

日本傳存『王勃集』殘卷景印覺書

道坂昭廣

日本國內に傳存する『王勃集』殘卷は、明治から大正の時期に発見され、景印されることによって廣く知られ、重要な學術資料として研究されることになった。このような発見と景印は、ひとり『王勃集』だけではなく、明治以降の古鈔本に對する日本の社會の興味と學術界の意識が反映されているように思われる。

以下、その発見から影印に至る経緯について、現時點までに調べ得たことを纏めておきたい。

一、正倉院藏『王勃詩序』¹

『王勃集』殘卷のなかで、最初に発見されたのは正倉院に藏されていた『王勃詩序』である。明治5年（1872）、博物局局長町田久成等による壬申検査と稱される調査の際に発見された。明治17年に博物局より石版景印され²、楊守敬が『日本訪書志』で紹介、佚文を翻刻し廣く知られることとなった。

博物局は、壬申検査の際に発見確認した古寫本を幾種か刊行している。同館編『東京國立博物館百年史』³によると、明治14年に『東大寺獻物帳 一冊』⁴、明治15年『伊都内親王御願文（逸勢書/石版摺） 一卷』『嵯峨天皇宸翰 石版摺 一卷』『空海請來目錄 石版摺 一卷』『杜家立成雜書要略 石版摺 一卷』が擧がっている。ただ『王勃詩序』殘卷は擧げられていない⁵。

¹明治17年（1884）石版景印、大正11年（1922）玻璃版景印。

²東京國立博物館資料館と遼寧省圖書館（羅振玉舊藏本）に保存されており、『詩序 唐人書 東大寺正倉院御物』と題されている。また「明治十七年三月二十七日出版届 博物局藏版」と記されている。

³東京：第一法規社、1973年

⁴『東大寺獻物帳』のみ石版の文字はないが、關西大學圖書館内藤文庫の所藏をみると、石版である。

⁵國會圖書館には明治14年10月10日出版届、『伊都内親王御願文』40錢。明治15年10月10日出版届『嵯峨天皇宸翰』（青蓮院藏）一枚5錢。明治15年10月12日出版届『御請來目錄』『杜家立成雜書要略』それぞれ一枚5錢と、價格の記入もあるものが藏されている。

蜷川式胤は壬申検査に同行し、『奈良の筋道』という日記を残している⁶。そこに正倉院において調査した寶物を列挙している。古器物については簡単な印象を書いている場合があるが、『王勃詩序』を初めとする古鈔本、特に中國典籍類についてはそのような記述はない⁷。

博物館の壬申検査に續いて、印刷局局長得能良介が明治12年（1879）に關西を中心とした調査旅行を行った。得能自身の手になる『巡回日記』（東京：印刷局、1889年）が残されているが、正倉院寶物の調査の詳細は記されていない。しかしこの調査をもとに印刷局は、現在でもその技術が高く評價される多色石版印刷『國家餘芳』などを發行する。朝陽閣集古という古寫本の景印シリーズもその成果のようである。

朝陽閣集古が、どのような古寫本を景印したのか、その全貌は分からない。國立印刷局「お金と切手の博物館」ウェブサイトの收藏品解説によると、朝陽閣集古について「明治16年に完成、販賣されました。初版時は全8巻でしたが、大正時代に復刻されたものは細分化されて14巻となっています」と紹介しているが⁸、その基づくところは分からない。關西大學圖書館内藤文庫に、このサイトで言うところの大正時代の再版時の際のものと思われる「印刷局石版刷價格表」があった。内藤文庫の「價格表」は大正8年のものであるが、『官報第2799號』（大正10年11月30日）にも「印刷局藏版法帖類畫像發賣」という宣傳があった。

以下内藤文庫藏の「價格表」に従って列挙してみる。

印刷局石版印刷定價表

番號	名稱	編集書目	組枚數	定價
1	國華餘芳 乙 古書之部 一冊	嵯峨帝宸翰外十一	13 枚	1, (圓) 440
2	國華餘芳 甲 古器物之圖 一帖	(省略)	19 枚	3,700
3	國華餘芳 乙 古器物之圖 一帖	(省略)	13 枚	3,300
4	國華餘芳 丙 古器物之圖 一帖	(省略)	13 枚	3,300
5	朝陽閣鑑賞 一冊	興福寺金欄他九種	14 枚	1,650
6	波間乃錦 一冊	眞鯛他數種	15 枚	2,000
7	朝陽閣帖 一帖	(省略)	24 枚	900
8	朝陽閣帖 一帖	(省略)	16 枚	750
9	朝陽閣帖 一帖	(省略)	20 枚	900
10	朝陽閣帖 一帖	(省略)	18 枚	950
11	朝陽閣帖 一帖	(省略)	18 枚	950
12	朝陽閣帖 一帖	(省略)	17 枚	900

⁶米崎清實『蜷川式胤「奈良の筋道」』（東京：中央公論美術出版社、2005年）。

⁷『奈良の筋道』によれば、正倉院調査は8月11日に始まり、20日に終わる。『王勃詩序』殘卷は13日に調査している。注6書、175頁。

⁸<http://www.npb.go.jp/ja/museum/tenji/gallery/choshuko.html>

13	朝陽閣帖 一帖	(省略)	27 枚	1,400
14	朝陽閣帖 一帖	(省略)	16 枚	850
15	朝陽閣帖 一帖	(省略)	15 枚	800
16	朝陽閣帖 一帖	(省略)	36 枚	1,800
17	朝陽閣帖 一帖	(省略)	35 枚	1,750

この後、18～28 まだが朝陽閣集古である。『官報』では23～35 まだが朝陽閣集古である。『國家餘芳』は、湖南文庫藏「價格表」では4種類であったものが、『官報』は3種類になっている。しかし朝陽閣帖は6～21 と16種類⁹になっており、「價格表」と比べると、5種増えたことになる¹⁰。

朝陽閣集古の全てを実際に見ることが出来たわけではないが、國會圖書館と、東京大學史料編纂處で一部を見ることができた。それぞれの情報を、「價格表」を基準として書き加えてみる。「官」は『官報』、「國」は國會圖書館、「東」は東京大學史料編纂處の略である。

18 樂毅論他一種

光明皇后樂毅論一・杜家立成一	17 枚	900 (90 錢)
官 23 同名	17 枚	1,500 (1 圓 50 錢) 以下同
東 同名	卷子本	
國 同名	卷子本	

國會圖書館本は

本紙末に「明治癸未」の圓形印と

「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印がある。

卷末に

「明治十六年十二月廿一日 出版版權屆

印刷局藏版

定價金貳圓」の印

19 聖武天皇宸翰他七種

省略	18 枚	950
官 24 同名	18 枚	1,500
東 同名	卷子本	
國 同名	卷子本	

國會圖書館本は

⁹朝陽閣帖については、西嶋慎一「大藏省印刷局・朝陽閣帖の謎」(大東文化大學書道研究所『大東書道研究』14、2006年)という研究がある。それによると『官報』に無い一帖があり、全部で十七帖が発行されたという。

¹⁰『官報』6～10が「價格表」に無い。即ち「價格表」の朝陽閣帖7～17は、『官報』の11～21に當る。

本紙末に「明治癸未」の圓形印と
「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十六年十二月廿一日 出版版權屆
印刷局藏版
定價金貳圓參拾圓」の印

20 小形 卽身成仏品

弘法大師書卽身成仏品	12 枚	400
官 26 同名	12 枚	800
東 同名	卷子本	
國 同名	卷子本	

國會圖書館本は

本紙末に「明治癸未」の圓形印と
「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十六年十二月廿一日 出版版權屆
印刷局藏版
定價金貳圓參拾圓」の印

21 長谷寺縁起文

菅原道眞長谷寺縁起文	18 枚	1,450
官 27 同名	18 枚	1,800
東 同名	卷子本	
國 同名	卷子本	

國會圖書館本は

本紙末に「明治癸未」の圓形印と
「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十七年□一月廿九日 出版版權屆
印刷局藏版
定價金貳圓六拾圓」の印

＊年月日の七、□一、九は抹消後書き直している。

22 請來目錄

弘法大師書請來目錄	21 枚	1,550
官 28 同名	21 枚	2,000
東 同名	卷子本	
國 同名	卷子本	

國會圖書館本は

本紙末に「明治甲申」の圓形印と
「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十七年八月十三日 出版版權屆

印刷局藏版

定價金三圓」の印

23 五悔文他一種

弘法大師書五悔文・風信狀 11 枚 800

官 29 同名 11 枚 1,100

東 同名 卷子本

國 同名 卷子本

國會圖書館本は

本紙末に「明治甲申」の圓形印と

「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十七年八月十三日 出版版權屆

印刷局藏版

定價金壹圓七拾錢」の印

24 重盛之書 1 枚 070

官 30 同名 1 枚 150

東 無し

國 無し

25 弘法大師聾瞽指歸甲之部 21 枚半 1,500

官 31 同名 22 枚 2,500

東 同名 卷子本

國 無し

26 弘法大師聾瞽指歸乙之部 25 枚半 1,780

官 32 同名 26 枚 3,000

東 同名 卷子本

國 無し

27 道風・佐理・行成三蹟 17 枚 1,190

官 33 同名 17 枚 1,700

東 同名 卷子本

國 無し

28 東大寺所傳詩序	25 枚	1,750
官 34 同名	25 枚	3,000
東 同名	卷子本	
國 無し		

29 紙表紙（國華餘芳ノ分）	1 枚	020
官 36 法帖類用表紙（賣切）		

「價格表」に無く『官報』にあるもの

官 22 道風書	10 枚	1,000
東 無し		
國 道風書 御物（付箋による）	卷子本	
國會圖書館本は		

本紙末に「明治壬午」の圓形印と

「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十六年十二月廿一日 出版版權屆

印刷局藏版

定價金壹圓貳拾五錢」の印

官 24 卽身成仏品		
弘法大師書卽身成仏品	15 枚	1,500
東 無し		
國 無し		
官 35 圓珍唐國通路券	4 枚	500
東 無し		
國 無し		

國會圖書館にのみあるもの

佐理書（御物）道風書（御物）貫之書（御物）家隆書（御物）弘法大師書（御物）

*弘法大師のみ3作品

本紙末に「明治壬午」の圓形印と

「大藏省印刷局鑑賞上石之記」の長方形印。

卷末に

「明治十六年十二月廿一日 出版版權屆

印刷局藏版

定價金壹圓七拾五錢」の印

*佐理書は「去夏帖」、道風は「玉泉帖」。貫之・家隆は假名文字。

朝陽閣帖の場合と同じく、『官報』は「定價表」に無い明治16年出版版權屆の「道風書」が最初に来るが、後は基本的に同じ並びである。

またこれを見ると、國會圖書館藏本が明治の所謂初版本のように思えるが、大正8年の「定價表」は、概ね1枚7錢、大正10年の『官報』の方は内容に依るのであろうか、価格は一定の基準は無いが1枚10錢前後、ところが國會圖書館藏本はみな1枚10錢以上¹¹で、東大本は価格がわからないが、最も高價であるのが不思議に感じる。國會圖書館本に押された紀年の印は、明治15・16・17年の三印であるが、版權免許は「明治16年12月21日」と「明治17年8月21日」の二種に分かれる。前者は紀年の印は「壬午」（明治15年）と「癸未」（同16年）。後者は「甲申」（同17年）である。「長谷寺縁起文」は紀年の印は「明治癸未」であり「明治十七年一月廿九日」の出版版權届は訂正前は「明治十六年十二月廿一日」であったようである。その訂正の理由はわからない。以上のことから、発行は明治16年17年の二年であったと思われる。また竝べてみると「定價表」も『官報』も前半が明治16年、後半は17年となっていることが分かる。假に朝陽閣集古シリーズが2期に分かれていたとするなら、シリーズ最後の「王勃詩序」¹²は、明治17年に發行されたと思われるのである。

さて、ではなぜこのシリーズに「王勃詩序」が入ったのであろうか。弘法大師空海の書が多く採られていることに見られるように、このシリーズは奈良朝から平安（鎌倉初期）朝の名筆が選ばれている。ただ他の景印はみな、筆寫者が明らかであるが、「王勃詩序」のみ筆寫者が不明である。しかし『奈良の筋道』を見てみると

詩序 一卷 慶雲四年七月廿六日 積善藤家ノ印有 五色紙二十玖張
杜家立成雜書要書 一卷 右と同筆

とある。『王勃詩序』も光明皇后の筆寫と見なされていたのである¹³。これが朝陽閣集古の一として採録された理由であったのではないだろうか。そしてこのことは逆に、『王勃詩序』、そして佚書である『杜家立成要略』、また佚文を含む聖武天皇『雜集』も、その内容、即ち中國の典籍であることを理由として選ばれたのではないということを示している。では、なぜ景印されたのだろうか。『王勃詩序』も

¹¹表装の費用が含まれているかもしれない。『官報』では、この価格は所謂「マクリ」の値段で、表装は別途費用が必要という。

¹²『官報』では「圓珍唐國通路券」が更に後にある。

¹³東京國立博物館藏『壬申検査寺社寶物圖集第九』も「王勃詩序」の卷末の紀年の部分を雙鈎で模寫しているが、「光明皇后御書卷跋」と題している。また、同館には壬申検査の調査目録である『古器物目録』五巻が保存されており、樋口秀雄氏により翻字されている。正倉院調査の部分は、「壬申検査「古器物目録」——正倉院の部」の題で、『MUSEUM 東京國立博物館美術誌』256～258（1972年6月～8月）に掲載されている。そこでも『杜家立成雜書要略』の後に「詩序と同書」とある。

含め、これらが博物館や印刷局で販賣された以上、それを購入しようとする層が存在したのである。それはどのような人々であったのだろうか。

朝陽閣帖は中國人の手蹟を集めた法帖¹⁴で、これに對して朝陽閣集古は日本人の手蹟であった。そのことから考えれば、朝陽閣集古も当初は書道文化界の需要を意識して景印發行されたのではなかったであろうか。博物館と印刷局がともに景印したのが名筆であったという點に注目するならば、それだけ書道界の需要が大きかったことを示しているのかもしれない。明治、特に楊守敬の來日が日本の書道に大きな刺激を與え、一種の書道文化界が形成される。博物館・印刷局が石版景印を賣り出したのは、その裾野がかなりの廣がりをもっていたことを示しているのではないだろうか。博物館の1枚5錢、印刷局の1枚10錢から18錢という價格が當時においてどの程度の負擔であったのかは、調査し得ていない所であるが、しかし、石版という新技術によって、より精巧な複製が容易に手に入るようになったということは、注目されてよいのではないだろうか。

ところで、テキストとして『王勃詩序』の景印に最初に注目したのは楊守敬であり、佚文を翻刻し『日本訪書志』に掲載した。明治17年(1884)5月に歸國した楊守敬¹⁵は、同年8月に發行された朝陽閣集古本を見ることは不可能であり、3月發行の博物館景印本を見たと思われる。

楊守敬は『王勃詩序』を紹介したが、これが正倉院所藏であることを知らなかったとする。ただ、この點については、やや疑問を感じる。楊守敬は1880年(光緒6・明治13)に來日し84年に歸國する。そして1897年(光緒23・明治30)に『日本訪書志』編纂した。また書影を模刻した『留眞譜』初編は1901年(光緒27・明治34)の序をもつ。そこには『王勃詩序』と同じく正倉院御物の「樂毅論」(『留眞譜』卷6)すべてと、全卷ではなく連續しない數紙分の『杜家立成雜書要略』(同卷11)が掲載されている。『留眞譜』に載る『杜家立成雜書要略』は、朝陽閣集古本に見えない「積善藤家」の印があることから、これも恐らくは博物館本であろうと思われる¹⁶。楊守敬は『王勃詩序』の景印だけを得たのではなく、博物館から石版景印された鈔本を幾つか持ち歸ったと考えられる。また、東京國立博物館資料館と遼寧省圖書館に藏される「東大寺所傳唐人詩序」には「博物館藏版」とあり、楊守敬はそれが博物館より石印されたものであることが分かったはずである。彼が博物館局長町田久成と交流があったことは『日本訪書志』に何度か名前が出

¹⁴朝陽閣帖については、西嶋慎一「大藏省印刷局・朝陽閣帖の謎」を参照。この論文によると、朝陽閣帖の法帖選擇には楊守敬の影響が見られるという。

¹⁵岡千仞『觀光紀遊』によると、明治17年5月29日に岡は横濱から出帆したが、歸國する楊守敬も同船している。

¹⁶但し現在のところ、博物館が「樂毅論」を景印したという記録は見つけられない。

ることから明らかである¹⁷。また朝陽閣集古を發行した印刷局についても、『日本訪書志』に言及があるだけでなく、局長得能良介が招聘した森立之こそ、楊守敬の書誌學研究を深めた人物であった¹⁸。彼らとの會話の中に、正倉院御物の古鈔本が出なかったのであろうか。「樂毅論」、『杜家立成雜書要略』についても、楊守敬が何も説明を加えていないことも含め、彼がこれらの所藏先を知らなかった（知らされなかった）のか、或いは明言を避けたのかは分からない。

それはさておき、『經籍訪古志』に象徴されるように、江戸時代から書誌學研究は行われていた。ただ、楊守敬や、彼の上司である何如璋らが、日本に傳存する古鈔本・古刊本を収集購入し翻刻模刻したことは¹⁹、中國ばかりでなく、日本の書誌學を發展させることにもなった。少なくとも正倉院藏『王勃詩序』が書蹟としてではなく、テキストとして注目されるのは、楊守敬が『日本訪書志』で紹介して以降であったと思われる。

但し明治の書誌學は森立之とその周邊の人物達が遺老の如くその學術を守っていただけではない。『新撰字鏡』の所有者達に博物館への獻納を慫慂したというような記事を始めとして、『日本訪書志』に記録される町田久成の活動²⁰は、書道界の關心と異なるものがうかがわれ、書道文化界と重なりつつも典籍研究の新しい動きを示すものとして注目される。更に恐らく町田が首唱したと思われるこのような博物館の石版景印も、彼が意圖していたかはさておき、書誌學の發展に寄與することになったのではないだろうか。即ち當初は、書道文化界に向けて發行したのであろうが、一方でより容易に古鈔本を見ることが出来ることになり、楊守敬を始めとする中國人の購書や『日本訪書志』などの公開と併せて書誌學研究を刺激する²¹ことにもなったのではないだろうか。

『王勃詩序』についても、從來楊守敬による紹介のみが注目されるが、實はそこに石印という新技術による景印の存在があったこと、そしてその景印がその後の

¹⁷例えば『廣韻五卷（北宋刊本、刻入古逸叢書中）』（卷三）では、自分のもつ『漢印譜』と町田が所有していたこの書を交換したとある。また『留眞譜』初編の序でも巖谷修と町田の名を擧げて在日中の圖書閱覽の便宜に感謝を述べている。

¹⁸『春秋左氏傳殘卷（舊鈔卷子本）』（卷一）は、「癸未春、日本印刷局借得、欲石印、余得往讀之」とある。また『篆隸萬象名義三十卷（舊鈔本）』（卷四）は紙幣局で見たとある。

¹⁹陳捷『明治前期日中學術交流の研究』（東京：汲古書院、2003年）「第三部古典籍の中國への流出と清國公使館の訪書活動」を参照。

²⁰「町田云、第二第四兩冊、原爲鈴鹿氏所藏、餘十冊爲浪速井上氏所藏、兩家皆欲合并爲全書、而皆不肯割。町田爲局長時、勸兩家均納博物館、於是始全書」（卷4）。他にも町田の名は出ないが、古鈔本古版本の所有者が博物館にそれを納めたという記述が『日本訪書志』に見える。

²¹楊守敬の購書に、日本人が一種の危機感をもったことは、「この楊守敬が日本に古くから傳わる漢籍を大量に中國にもたらし歸ったことは、日本に於てもさすがに當時からいろいろな議論が起った」（神田喜一郎「中國の書物のことども」（『敦煌學五十年』東京：筑摩書房、1970年）と、紹介がある。

研究を進展の基盤となったことは、注意されるべきではないだろうか²²。

二、王勃集卷廿八²³

この巻は、『王勃集』残巻としてではなく、古寫本として江戸時代に既にその存在が知られていた。『王勃詩序』と同じく内藤湖南に詳しい紹介がある²⁴。それによれば、この残巻は江戸時代、吉田家が所蔵していた。吉田家は攝津國菟原郡住吉村呉田の豪商で、家傳の古物を模刻模寫して『聆濤閣帖』を作った²⁵。『王勃集卷廿八』は「集巻」の題で巻頭の一部が模刻され、その存在が知られたのである。

國會圖書館と筑波大學圖書館が『聆濤閣帖』という名の和本を所蔵している。兩圖書館の本は全く同じものであったが、昭和7年『美術研究』（美術研究所）所收正木直彦「聆濤閣古文書と集古帖」、田中喜作「聆濤閣藏文館詞林斷簡」が紹介する内容、また仁藤敦史「聆濤閣集古帖」（國立歷史民族博物館編『歷博』130、2005年）の紹介する内容²⁶とも異なる。ただ、湖南や『經籍訪古志』が言及し、更には楊守敬『留眞譜』（卷9）が模刻している巻頭部分は、兩圖書館本に同じものが掲載されている。

兩圖書館の『聆濤閣帖』は、「應神天皇木肖像」、「同背像」から始まり以下6人の肖像が掲載されている。

次に古寫本の一部が模刻されている。「河原繼麿寫經用紙解」「太平寶字記年經跋」「仁壽記年田券」「貞觀記年田券跋」「文館詞林跋」「越前國送米文」「具注曆」「兵書斷簡」「河内國大稅負死亡人牒」そして『王勃集卷廿八』の巻頭11行である「集巻」、「永久記年田券并籤」である。

續いて、「經之籤」「經筒」「五鈴鏡」「弘仁記年礎石」など古器物や出土物の模寫やその拓が載せられている。

『王勃集卷廿八』と『文館詞林』の一葉は、古文書と一緒に並べられており、これらは書誌學的興味であるよりも、むしろ考古學的興味から掲載されたと考えら

²²西野嘉章編『歴史の文字 記載・活字・活版』（東京大學総合研究博物館、1996年）によると、明治初年には石印の技法が日本に輸入されたが、その普及は10年頃からとされる。

²³明治43年（1910）玻璃版景印。この巻については以前紹介したことがある。併せて参照いただきたい。「傳橘逸勢筆「詩序切」と上野本『王勃集』の關係について」（『書法漢學研究』8、大阪：アートライフ社、2011年）。

²⁴『王勃集卷廿八』景印に附された「上野氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」。また『全集』14『寶左唐文』所收。

²⁵この他に『聆濤閣集古帖』『足利帖』も刊行されたという（仁藤敦史「聆濤閣集古帖」）。

²⁶反町茂雄『一古書肆の思い出4』（東京：平凡社、1989年）にも「攝津吉田家聆濤閣寶籍の放出」の章があり、『聆濤閣帖』について紹介している。兩圖書館本は、『聆濤閣帖』の一部複製本かも知れない。

れる。

『聆濤閣帖』がどの程度流通したのかはわからない。しかし澁江全善・森立之編『經籍訪古志』（巻6 集部）にその存在が紹介されており、江戸時期の書誌學者には知られていた。ただ「(塙) 忠實云、摂津國人喜平治家、又藏是書殘本一卷（墓誌/下）、卷端數行、模入於聆濤閣帖中、是也。憾未得觀某全軸、乃附識於斯、以俟他日續錄耳」と言うように、實際に目睹した者は少なく、傳聞として知っていたのであり、『翰林學士集』の一部と考えられていたことも含め、實物を見ることが困難であったことが分かる。この卷子本を實見し、『王勃集』殘卷であることを發見したのは内藤湖南である。

様々な學問分野において、巨大な貢獻を行った内藤湖南であるが、彼の書誌學的興味を刺激した人物に羅振玉がいる。少なくとも湖南の『王勃集』殘卷研究については、羅振玉との交流を指摘しなければならない²⁷。明治の書誌學は楊守敬らの購書活動による危機意識と『日本訪書志』の刺激によって始まったが、近代的な研究は羅振玉の來日と、歐米の新しい印刷技術による精巧な複製技術によって進展したと言えるのではないか。

『王勃集』殘卷に限っていえば、楊守敬は正倉院藏『王勃詩序』の石印を得て模刻した。それは紹介に止まったが、その後、印刷局の石版景印（朝陽閣集古の一）を得て、羅振玉は佚文を翻字し中國傳存作品について校勘を行った。またこの『王勃集卷廿八』についても、江戸から明治までは『聆濤閣帖』の卷頭 11 行の模刻しか知られていなかったが、吉田家から上野理一が購入し、それを實見した湖南が、『王勃集』殘卷であることを發見し、上野理一に勧め、湖南自身が跋文を付して景印した。湖南が紹介と公開を一體化し、研究を進展させたのである。

また景印の方法も楊守敬の『王勃詩序』や吉田家の『聆濤閣帖』における「集卷」と異なる。『王勃集卷廿八』は上野家が購入したのち、神田家が所藏してきた『王勃集』殘卷からはなれた「祭文」一篇とともに、玻璃版（コロタイプ印刷）に付される。石版より更に新しい印刷法を用い²⁸、より精巧な景印が行われたのである。そしてその景印の目的は、朝陽閣集古と同じではない。明らかに書誌學的研究の

²⁷ 湖南には、先に紹介した文の他、『王勃集』殘卷の全てについて論考があり、その一部には羅振玉の『王勃集佚文』に對する批判もある。しかし、遼寧省圖書館にある羅振玉舊藏『王勃詩序』は跋文によれば、湖南が贈ったものである。その他湖南はこの『王勃集卷廿八』『同卷廿九三十』の景印本や、南都秘極中の『王勃詩序』景印も彼に贈っている（『湖南文存』巻 16「與羅叔言（大正 12 年 3 月）」）。

²⁸ コロタイプ印刷は、1870 年頃實用化された。日本には明治 22 年（1889）小川一眞によって移入されたが、日本では 1900 年代に入って利用されるようになったとされる。『國立國會圖書館月報』609（2011 年）などを参照。

爲であった²⁹。

上野理一による古典籍や中國書畫の収集に湖南の影響があることは知られているが、吉田家からこの鈔本を購入する際し、内藤湖南の助言があったのかどうかは分からない。ただ、この景印の発行は、書誌學研究が書道文化界とは異なる独自の立場から古鈔本を見るようになったことを象徴する事件と言えるのではないだろうか。そしてそれは、楊守敬の刺激によって日本の書道文化界が再構築されたように³⁰、羅振玉の刺激と新しい印刷技術によって日本の書誌學研究が再構築されたことを示してもいたと考えられる。もちろん書道文化界は楊守敬來日以降、依然として強固に存在したことは、羅振玉とともに辛亥革命の混乱を避けて來日した王國維の手紙からも窺うことができる³¹。

整理すると、吉田家による模刻によって、この『王勃集』殘卷の存在は、正倉院藏『王勃詩序』よりも早く知られてはいた。しかしそれは一部だけで、また廣く公開されてなかったため、江戸時代の書誌學者は、その存在を聞いてはいても調査はできなかった。その状況は『留眞譜』に示されるように、明治になっても改善されなかった。技術的側面からみても楊守敬は、過渡期の書誌學に屬する。そして湖南や羅振玉等の研究から、書誌學は新しい段階に入ったと言える。そして石印や玻璃版など新技術によって古鈔本・古版本が、格段に精巧そして容易に見ることができるようになったことも、その進展に大きく寄與した。『王勃集卷廿八』は、その典型的な例と言えるのではないだろうか³²。

三、王勃集卷廿九三十³³

赤星家のオークションに出た『橘逸勢集一卷』を富岡鐵齋の息、謙藏（號、桃華）が5800円で落札した。この経緯については、神田喜一郎『藝林叢談』所收「牛のよだれ抄」³⁴と湖南「富岡氏藏唐鈔本王勃集殘卷」³⁵よって紹介されてきた。しか

²⁹ 湖南が景印されたばかりの『王勃集卷廿八』を中國出張の際に攜え、羅振玉に贈ったことはこの景印の目的を雄辯に語るものである（羅振玉『王子安集佚文』序など）。

³⁰ 楊守敬が日本の書道文化に果たした役割については多くの指摘があるが、例えば『書論』26（書論研究會、1989年）は、楊守敬を特集しており、その諸論考が参考になる。

³¹ 王國維「致繆荃孫」に「因此邦人於字畫頗知珍貴、碑帖初開風氣、此二項尚可得價」（顧廷龍校閱『藝風堂友朋書札』下冊（上海 上海古籍出版社 1981年））とあり、この當時にあっても楊守敬の影響を受けた書法を歓迎し、拓本法帖を購入しようとする風があったことを示している。

³² 『容安軒舊書四種』に附される湖南の序文（大正8年）を読むと、この家藏の古鈔本の公開は、少なくとも書蹟鑑賞を目的とはしていない。

³³ 大正10年（1921）玻璃版景印。

³⁴ 『神田喜一郎全集』（京都：同朋舎、1987年）。

³⁵ 『内藤湖南全集』卷7（東京：筑摩書房、1969年）。また景印本には「富岡氏藏唐鈔本王勃集殘卷漢文跋」が附された（『全集』14『寶左唐文』所收）。

しこれを手放した赤星家側にも資料があった。この時期の財界人を中心として勃興してきた茶道文化界のフィクサー的存在であった高橋義雄の記録である。高橋は、この文化界の多くのオークションに関わっているが、赤星家のオークションも彼が依頼を受けて、企画実施したものである。彼の日記『萬象録』や『近世道具移動史』³⁶を読むと、神田の記述に、小さな修正が必要となる。このオークションの品々は、赤星の當主、鐵馬の所有であったが、コレクション自体は父赤星彌之助が一代で収集した茶道具類であった³⁷。相續した鐵馬は茶道に興味なく、管理の手に苦しき賣り払うこととしたのである。鐵馬の所藏は間違いないが、その収集は父彌之助としなければならない。

現在の我々からすると、國寶『王勃集卷廿九三十』が『橘逸勢集』とされていたことにも驚くが、既に『王勃集卷廿八』が発見されていたにもかかわらず、なぜここまで発見されなかったのか。このオークションにおける主催者側の関心の低さに首をかしげる。

高橋は『近世道具移動史』で、大正年間を「道具移動第三期」とし、さらにこの時期を4期に細分化し、その第二を「成金時期」とする。この「成金時期」の記事中に「赤星家の入札事情」「赤星家入札實況」「赤星家落札品の行方」「赤星家第二、三回の入札」と4項を設けてこのオークションを詳しく紹介している。高橋は「赤星鐵馬氏が大正六年六月、先大人彌之助氏の遺品第一回入札賣却を執行したのは道具移動史に於て最も特筆大書すべき事件である」（208頁）と述べる。先に紹介したように、赤星鐵馬が父の収集した大量の茶道具類の管理に根を上げたというのがこのオークションの原因であった。高橋の日記によると、依頼を受けたのは大正6年1月29日のことである。

その後日記には、オークションに関する記録が散見されるようになる。例えば4月15日から18日にかけて、彼が赤星家に出向き入札品の點検を行っていることが記されている。17日はほぼ一日をかけて掛物類を點検し、18日は「午前八時半赤星邸に赴き、手始めに經卷、古筆、及び繪卷物等凡そ二百點を通覽し」たとあるが、『王勃集卷廿九三十』（『橘逸勢集一卷』）について、言及はない。

オークションは、大正6年6月11日、同年10月8日、10月15日の三回に分け

³⁶日記は『萬象録 高橋籌庵日記』として整理されつつある。關係部分は第5巻大正6年（京都：思文閣出版、1988年）。『近世道具移動史』（東京：慶文堂書店、1929年）。

³⁷赤星鐵之助については、『近世道具移動史』「道具移動第一期」に「道具界の鰐魚」と題して赤星彌之助を紹介している。それによると薩摩出身で政商とも言える彌之助は、明治24年頃からその財力に任せて、「名器と云う名器を呑み盡さずんば已まざる、鰐魚の如き威力を發揮した」（102頁）とある。また、多くを高橋義雄の記録に依っているように思われるが、松田延夫『益田鈍翁をめぐる9人の數寄者たち』（東京：里文出版、2002年）も第三章で彌之助を紹介する。

て行われた。3回のオークションはそれぞれ『目録』が作られた（第2回を除き、第1第2回の目録は表紙に目録とあり、内表紙に「(第二回・第三回) 赤星家所蔵品入札」そして下見の日時、入札開札日、会場が記されている）。それによると、すべて兩國美術倶楽部で行われ、第1回は300點、第2回380點、第三回806點が出品された。

『王勃集卷廿九三十』は『第二回目録』に「81 橘逸勢集一卷」として、「82 大般若經一卷」とともに94頁に擧がっている。『目録』を見ると、オークションの中心はもちろん茶碗など茶道具であったが卷子本も出ている。高橋は掛物類などについて、古筆の鑑定にも優れる田中親美³⁸を招き鑑定させている（4月17日）。しかし、高橋の記録には『王勃集』残卷（『橘逸勢集一卷』）を含め、卷子本について全く言及がない。また、神田喜一郎・内藤湖南等によって富岡謙藏が高額で落札したことが特筆されるのに對し、この古鈔本に關しては、オークション前後でも高橋等主催者は何も言及していない。もちろんそれは理解しやすいことで、彼らの關心が茶道具にあり、『王勃集』残卷を含む卷子本はさほど注目していないからである³⁹。また高橋は、それぞれのオークションで1萬圓以上の價がついた品を列擧している。第1回は「梁楷筆雪中山水」の二十一萬圓をはじめとする92品、第二回は「名物眞如堂茶入」五萬千百圓など14品である。第三回は高橋によれば、「殆ど瓦落多品のみ」で、1萬圓以上は一品のみというが、第一回の総額は395萬圓、第二回は87萬圓、三回合計は510餘萬圓というから、相當大規模なオークションであった。彼らにとって『王勃集第廿九三十』（『橘逸勢集一卷』）は思わぬ高値で落札された一品であったかもしれないが、價格においても全く興味を引かなかったのである。

高橋によれば、明治半ば頃より、舊大名家の所藏などが市内に出るようになり、明治末よりオークションが開かれるようになる。その参加者の多くは、高橋の言葉をそのまま用いれば「成金」であるが、要するに財界人を主なメンバーとする茶道文化界が形成されたのである。彼らの興味は茶器などの茶道具と、茶室の裝飾品たる書畫（掛物）であった。古鈔本は過去において、裝飾品とする爲に切り取られたことがあったが、明治以降昭和にあっても、この文化界にはそのような意識があった⁴⁰。この文化界の屬する大多數は鈔本に對して書誌學的な關心、或い

³⁸ 田中親美の生涯と功績については、名寶刊行會編『田中親美』（東京：展轉社、1997年）に紹介がある。

³⁹ 高橋等は古鈔本に對して、さほどではなく、全く關心が無かったのかもしれない。例えば「殆ど瓦落多品のみ」という第三回入札會に、不空三藏「表制集」が出品されている。この古鈔本は上野理一が落札、後に國寶（舊國寶、現在は重要文化財）に指定されている。

⁴⁰ このような割裂について、神田喜一郎「この暴擧をいかにせん——古書割裂に對する一提案」（『藝林談叢』のち『全集』8）が参考になる。この文章は、直接には西本願寺三十六人歌集の割裂

は保存意識は少なかったと言える。

茶道具とそれに關わる一切を取り扱った赤星家のオークションと、書籍のオークションとしては最高最大規模と稱された富岡家の藏書を扱ったオークション⁴¹を單純に比較することはできないが、赤星家のオークションで落札した『王勃集卷廿九三十』が最初に、寫眞及び解説付きで擧げられている『富岡文庫御藏書入札目録』と比べてみると茶道文化界と書誌學研究界との關心の違いが際立つ。更に兩者のオークションに關わった者を見ると、赤星家のオークションは當時の有力な道具屋（古美術商）が名を連ねるが、書籍を扱う人物商店は入っていない⁴²。一方富岡家のオークション⁴³は、當然ながら差配である大阪の鹿田松雲堂を始め、京都・東京の書店が並ぶ⁴⁴。

正倉院藏『王勃詩序』が、當初書道界を對象として發行されたように、大正時期になると、それに加えてこのような財界人を中心とする茶道文化界が勃興し、赤星鐵之助のように大名家・舊家から流出した古美術を収集するようになる。その収集の範圍に古鈔本も含まれていたのである。ただ彼らにとって、それは美術品であって學術的資料ではなかった。もちろん、そのオークションの『目録』が送付されているのであるから、富岡家、また上野理一も、勃興した茶道文化界と關わりはもっていた。しかし、一方で、羅振玉の來日以降、書誌學研究界も搜索の範圍を着實に廣げつつあったと言えよう。上野理一や富岡謙藏のように、茶道文化界にも屬する書誌學研究界の人物が、そのようなオークションから、多くは日本の寫本であるが、古鈔本・古版本を發見することになるのである。

ところで『王勃集卷廿九三十』は、吉田家にあった『王勃集卷廿八』と比べると、出現から時間を経ずに『王勃集』殘卷の一であることに氣付かれた。それは既に『卷廿八』が發見されていたこともあるが、それだけが理由とは言えないのではない。赤星家は、このオークションの爲に造った『目録』は、美術書出版で

に對する批判として書かれた。この割裂を行ったのは高橋義雄が屬する茶道文化界の人々であった。高橋は『近世道具移動史』で「近世道具移動史中に於る最も光輝ある一大事件と謂ふべきであらう」（468頁「三十六人集分讓の由来」）と評する。この二人の感想の違いが、二つの文化界の意識の違いを鮮明に表している。なお割裂は昭和4年の出來事である。

⁴¹富岡家藏書のオークションについては、反町茂雄『一古書肆の思い出2』（東京：平凡社、1986年）「III 大入札會の諸相」に「昭和最大の賣立」として紹介される。他に千代田圖書館が2011年「古書販賣目録にみる昭和期最大の入札會——富岡鐵齋・謙藏のコレクション」という特別展を開催している。

⁴²列舉すると〔東京〕山澄力三・中村作次郎・稻澤安藏・川部利吉・宗與・多聞店、〔京都〕林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛、〔大阪〕戸田彌七・山中吉兵衛・山中與七・春海敏。

⁴³『王勃集卷廿九三十』を購入したのは長尾欽彌であった。彼も昭和18年コロタイプ印刷で景印している。

⁴⁴列舉すると〔東京〕朝倉屋書店・村口書房・文求堂書店・一誠堂書店・反町弘文莊、〔京都〕佐々木竹苞樓・細川開益堂、〔大阪〕鹿田松雲堂。

定評のある審美書院⁴⁵が擔當し、『王勃集卷廿九三十』も小さくはあるが巻頭から最初の「行狀」40行あまりの鮮明な寫眞が掲載された。吉田家の「集卷」模刻とその違いは大きい⁴⁶。富岡謙藏が一見して『王勃集』殘卷と見抜いたのはこのような精巧な寫眞の故もあるであろう⁴⁷。

この後、この『王勃集』殘卷は、京都帝國大學文學部から、玻璃版によって景印された⁴⁸。ここにおいても湖南や羅振玉は、より精巧な印刷技術を採用することによって研究の便を圖ったのである。

おわりに

『王勃集』殘卷は、當初、考古學的興味、優れた手蹟として、或いは趣味世界の裝飾品として紹介された。それはそれぞれの時期の社會の好尚を反映している。そのような社會の興味を受けて『王勃集』殘卷は、模刻、そして石版の方法で景印された。より多くの人々が容易に、より精巧な複製を見ることができるようになったのである。そのことは必ずしも學術研究に資することを目的として爲されたわけではなかった。しかし結果として書誌學をはじめとする學術を進展させることになった。

内藤湖南の『王勃集』殘卷に對する考證は、このような他の文化界の興味に敏感に反應した成果とも言えるが、『王勃集』殘卷それぞれの玻璃版を用いた景印とそれに附された湖南の跋文は、明治以來の書誌學の一つの到達點を示すものでもあった。『王勃集』殘卷の發見と景印は、日本の近代の書誌學研究の一つの象徴と言えよう。そして『王勃集』殘卷をはじめ、多くの古鈔本古版本について玻璃版による景印を促し、さまざまな側面からそれらに對する研究紹介を行った内藤湖南の研究は、彼の多くの功績の一つとして、今後更に詳しく調査考察されなければならないのではないだろうか。

（作者は京都大學人間・環境學研究科教授）

⁴⁵村角紀子「審美書院の美術全集にみる「日本美術史」の形成」（明治美術學會『近代畫說』1999年）参照。

⁴⁶流通の規模も大きく異なっていたのではないだろうか。『聆濤閣帖』と赤星家の『目錄』は目的を異にするとはいえ、高橋の日記（3月31日）によると、『目錄』は13500部の印刷が計劃されている。

⁴⁷神田喜一郎「清六大家畫譜」と「王勃集」（『上野理一傳』（大阪：朝日新聞社、1954年）によると、上野理一も氣付いたが、入札で富岡に敗れたという。

⁴⁸京都帝國大學文學部より「京都帝國大學文學部景印舊鈔本」のシリーズの一として發行されたが、その費用が羅振玉の捐金によることは、狩野直喜の跋文に詳しい。